様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１６２０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６５２１２１

研究課題名（和文）協同学習を基盤とした内容重視の教授法が受講生の英語力と動機づけに与える影響

研究課題名（英文）Effects of Content-Language Instruction With Collaborative Learning Activities on Learners' English Proficiency and Motivation for Learning

研究代表者
岩中　貴裕（Iwanaka, Takahiro）

香川大学・大学教育開発センター・准教授

研究者番号：５０２３２６９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究によって、協同学習を取り入れた内容理解重視の授業は英語力の高い学習者だけでなく、英語学習に対して強い苦手意識を持っている学習者に対しても有効な指導法であることを実証した。英語が苦手な学生に対して調査を実施した結果、彼等の英語力の伸長がもたらされることが示唆された。さらに英語学習に対する動機づけの向上がもたらされることが確認できた。
英語力の高い学習者(TOEICスコア550点以上)については、アウトプットの質の向上がもたらされることが示唆された。協同学習を取り入れた内容重視の授業にライティング活動を取り入れて調査を行った結果、学習者のエッセイの質の向上がもたらされることが確認できた。

研究成果の概要（英文）：The present study showed that contant-language instruction with collaborative learning activities would be effective for learners with low English proficiency as well as for those with high English proficiency. It was suggested that learners with low English Proficiency would develop their English proficiency through content-language instruction with collaborative learning activities. They are also likely to increase their motivation for learning through the instruction.
It was also suggested that the instruction would encourage learners with high English proficiency to produce better output. Collaborative writing activities were incorporated in the instruction. During the collaborative writing activities, the students taking the course received positive feedback on the content of their essays from their peers and the teacher. By rewriting their essay based on the feedback, they came to reprocess their output more carefully and developed their writing proficiency.

研究分野：教室第二言語習得

キーワード：教室第二言語習得研究　協同学習　内容・言語統合学習

１．研究開始当初の背景

言語とその意味内容はコインの裏表のようなものであり，両者は別々にではなく統合的に提示されるべきである（Coyle, Hood, & Marsh, 2010）。日本ではまだその実践数が限られているが，内容と言語を統合的に提示するという指導（以下，Content-Language Instruction，CLI）が学習者の言語運用能力の向上に貢献することが欧米では既に実証されている（Zarobe & Catalan, 2009）。

第二言語（Ｌ２）をコミュニケーションのために使用する能力は，その学習条件が母語（Ｌ１）習得環境に似ている時に効果的に習得されるとされている（Krashen, 1982; Long, 1990; Swain, 2000）。つまり以下の３つの条件を満たす必要がある。

(1) 言語形式ではなくその意味に焦点があてられている。
(2) i+1 インプットが十分にある。
(3) 不安の少ない場面で目標言語を意味のやり取りのために使用する機会がある。

CLI は上記の３つの条件を満たす可能性の高い指導方法であると考えられる。

本研究課題が着目したもうひとつの要素は協同学習である。協同学習によって以下のような効果がもたらされることが確認されている（Barkley, Cross, & Major, 2005; Jacobs, Power, & Inn, 2002）。

(1) 学習意欲が向上し学業成績が向上する。
(2) 自分の学習に対する責任感が増大する。
(3) 主体的に課題に取り組んでいる時間が増える。
(4) 協調的技能が向上する。

CLI に協同学習を取り入れることによって学習者の英語学習に対する動機づけと英語力の向上がもたらされると考えた。

２．研究の目的

以下の３つの研究上の問いを明らかにすることを，本研究課題の目的とした。

(1) 協同学習を取り入れた CLI は学習者の英語力の向上に貢献するのか。
(2) 協同学習を取り入れた CLI は学習者の英語学習に対する動機づけの向上に貢献するのか。
(3) 学習者の持つ文法知識は英語学習においてどのような役割を担うのか。

３．研究の方法

研究代表が勤務する大学において調査を行った。以下，調査参加者，収集したデータ，データ収集の枠組みについて説明する。

3.1 調査参加者

調査参加者は，研究代表が担当する授業の受講生である。以下の条件を満たす学生のみを調査参加者とした。

(1) 英語教育，英米文学等を専攻していない。
(2) 英語圏にトータルで半年以上滞在した経験がない。
(3) 中学校入学時に英語学習を開始した。
(4) 日常生活において英語を使用する機会がない。

上記の条件を満たす学生は，一般的な日本人英語学習者であると言える。幼少期に英語を学んだ経験があるような，特別な英語学習環境にいる学習者は，調査参加者に含めなかった。

3.2 収集したデータ

本研究実施期間中に収集したデータは以下の通りである。

(1) 英語力判定テスト
調査参加者の英語力を客観的に測定するために実施した。本研究では G-TELP，VELC，TOEIC-IP を使用した。

(2) アンケート
調査参加者の動機づけ，授業に対する態度を測定するためにアンケートを実施した。アンケートは研究代表者が作成した。使用したアンケートは試行によって内的整合性を検討した。

(3) インタビュー
調査参加者に対して構造化されたインタビューを実施した。収集したデータは NVivo を使用して分析した。なお，NVivo によって分析したデータは本報告書作成時点では未公開である。

3.3 データ収集の枠組み

データ収集は，研究代表者の担当する授業の受講生に対して行った。毎回の授業の構成は村野井（2006）を参考にして検討した。原則として以下の構成で毎回の授業を行った。原則として英語を教授言語として使用した。

(1) Presentation（提示）
題材内容を口頭導入（oral introduction）し，適切な文脈を与えながら語彙項目の提示を行った。

(2) Comprehension（理解）
平易な英語での言い換え，視覚教材を用いて，教科書または DVD の内容理解を中心とした活動を行った。

(3) Practice（練習）
語彙の発音練習，オーバーラッピング，パラレル・リーディングを行った。意味に配慮しながら音読できることを目標とした。

(4) Production（産出）
要約，story retelling，ディクトグロス，スピーチ，コミュニケーション活動を行った。

データの収集は二時点（授業開始時と授業終了時）で行った。二時点でデータを収集することによって，調査参加者の変化を捉えることを試みた。その枠組みを説明する。

第１回目の授業（第一時点）
調査参加者の英語力を測定するためのテスト，動機づけを測定するためのアンケートを実施した。

第２回目～第 15 回目の授業
協同学習を取り入れた内容理解重視の授業を実施した。

第 16 回目の授業（第二時点）
調査参加者の英語力を測定するためのテスト，動機づけを測定するためのアンケートを実施した。アンケートは第一時点と同じ内容である。英語力を測定するためのテストは第一時点で使用した物とは異なる内容ではあるが，得点の比較が可能なテストである。さらに構造化されたインタビューを実施した。

以上のような手順でデータ収集を行った。その流れを図１に示す。

データ収集（第一時点）
↓
処置（treatment）
↓
データ集（第二時点）

図１ データ収集の枠組み

４．研究成果
本研究によって以下に挙げる３点が明らかになった。前述した研究上の問いに答える形で説明する。
まず協同学習を取り入れた CLI が調査参加者の英語力の向上に貢献することが確認できた。意味の理解を重視した授業を行うことによって，言語形式の習得が付随的にもたらされることが示唆された。しかし，英語力の低い調査参加者については，その効果が限定的であった。英語力の向上がもたらされることは確認できたが，調査開始時点で高い英語力を持っている調査参加者と比較すると，その効果は限られたものであった。
次に動機づけに与える影響について説明する。協同学習を取り入れた CLI は，調査参加者の英語学習に対する動機づけの向上をもたらすことが明らかになった。英語に対して強い苦手意識を持っている調査参加者も，協同学習を取り入れた CLI を好意的に受け入れた。
最後に文法知識が英語学習においてどのような役割を担うのかについて考察を加える。内容理解を主眼に置いた授業は，言語形式の付随的学習（incidental learning）を促進すると研究代表者は予測していた。調査期間中に収集したデータを分析した結果，文法知識はインプットのインテイクへの転換を促進する役割を担っていることが明らかになった。
調査開始時には想定していなかったが，英語力の高い学習者は，協同学習を取り入れた CLI によってアウトプットの質を向上させる傾向があることが確認できた。調査を実施した授業にライティング活動を取り入れてデータを収集した結果，彼等の書くエッセイの質の向上がもたらされることが確認できた。
本研究が明らかにした知見は，協同学習を基盤とした内容重視の教授法が高等教育機関において有効な教授形態であることを示唆している。今後は学生の専門に関連した内容を英語で教えることの効果を検証する必要がある。

（引用文献）

Barkley, E., Cross, K., & Major, C. (2005). *Collaborative learning techniques: A handbook for college faculty*. New York, NY: John Willey & Sons, INC.
Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010). *Content and language integrated learning*. Cambridge, England: Cambridge University Press.
de Zarobe, Y., & Catalan, M.(eds.)(2009). *Content and language integrated learning*. Bristol, England: Multilingual Matters.
Jacobs, G., Power, M., Inn, L. (2002). *The teacher's sourcebook for cooperative learning: Practical techniques, basic principles, and frequently asked questions*. London, England: Sage Publications Ltd.
Krashen, S. (1982). *Principles and practice in second language acquisition*. Oxford, England: Pergamon.
Long, M. (1990). Maturational constraints on language development. *Studies in Second Language Acquisition*, *12*, 251-285.
Swain, M. (2000). French immersion research in Canada: Recent contributions to SLA and applied linguistics. *Annual Review of Applied Linguistics*, *20*, 199-212.
村野井仁.(2006).『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』東京：大修館書店.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計 10 件）
① Iwanaka, T.(2015b). Factors facilitating the incorporation of linguistic forms: Explicit instruction or syntag-

matic relations or task repetition? *JACET Chugoku-Shikoku Chapter Research Bulletin*, *12*. 37-54. 査読有.

② Iwanaka, T.(2015a). Successful language learners and pedagogical suggestions for effective learning. *JAILA Journal*, *1*. 106-107. 査読有.

③ 岩中貴裕.(2014b).「協同学習を取り入れた内容重視の授業－そのリメディアル教育としての可能性－」『四国英語教育学会紀要)』第 34 号, 47-56.査読有.

④ 岩中貴裕.(2014a).「連辞関係についての明示的知識が第二言語習得において果たす役割」『香川大学教育研究』第 11 号, 43-54.査読有.

⑤ 岩中貴裕.(2013c).「エラー・コードを用いたライティング指導」『英語と英文学と（田村道美先生退職記念論文集)』73-82. 査読無.

⑥ 岩中貴裕.(2013b).「理工系学生を対象としたライティング指導：ライティングに対する不安の軽減」『四国英語教育学会紀要』第 33 号, 23-34.査読有.

⑦ Iwanaka, T.(2013b). Does explicit knowledge of syntagmatic relations contributing to the incorporation of linguistic forms? *ALAK 2013 International Conference,* 228-234.査読有.

⑧ Iwanaka, T.(2013a). Improving listening skills and motivation to learn English through dictogloss. *Journal of Higher Education and Research Kagawa University*, *10*. 37-49. 査読有.

⑨ 岩中貴裕.(2013a).「英語学習における多読と精読の役割」『ペルシカ（岡山英文学会学会誌)』第 40 号, 77-88.査読有.

⑩ 岩中貴裕.(2012).「英語力と学習意欲の向上に貢献する教室活動－考慮すべき３つの心理的欲求－」『四国英語教育学会紀要』第 32 号, 57-66.査読有.

〔学会発表〕（計 16 件）

① 岩中貴裕.(2014/10).英語が苦手な学習者を対象としたライティング指導－ライティングに対する不安の軽減－, 兵庫教育大学(兵庫県・神戸市).

② 岩中貴裕.(2014/10).英語教育における高大連携－これからの英語教育を考える－, 第 37 回岡山英文学会, 岡山大学(岡山県・岡山市). 招待講演.

③ Iwanaka, T.(2014/8). Effects of computer-aided feedback on the development of learners' writing proficiency JACET 53rd International Convention, Hiroshima City University (Hiroshima City).

④ Iwanaka, T.(2014/8). Effects of explicit syntagmatic knowledge on Japanese learners' noticing a hole, 17th World Congress of the International Association of Applied Linguistics, Brisbane (Australia).

⑤ 岩中貴裕.(2014/6).協同学習を取り入れた内容重視授業－そのリメディアルとしての可能性－, 平成 26 年度 JACET 中国・四国支部春季研究大会, 広島市立大学(広島県・広島市)

⑥ Iwanaka, T. & Sato, S.(2014/3). Indirect feedback in teaching writing: Do error codes help learners make their output more comprehensible? JAILA 3rd National Meeting, Keio University (Yokohama City).

⑦ Iwanaka, T.(2013/11). Using indirect feedback in correcting student writing, JAILA and Okayama University Joint Workshop, Okayama University (Okayama City).招待講演.

⑧ Iwanaka, T.(2013/10). Does explicit knowledge of syntagmatic relations contribute to the incorporation of linguistic forms? ALAK 2013 International Conference, Busan University of Foreign Studies (Busan, South Korea).

⑨ 岩中貴裕.(2013/8).アウトプット・インプット活動と言語形式の保持－連辞関係についての明示的知識が日本人英語学習者のインプット処理に与える影響－, 第 38 回全国英語教育学会, 北星学園大学(北海道・札幌市).

⑩ 岩中貴裕.(2013/6).英語学習におけるインプットとアウトプットの役割, 第 25 回四国英語教育学会香川研究大会, 香川大学(香川県・高松市).

⑪ 岩中貴裕.(2013/3).理工系学生を対象としたライティング指導－ライティングに対する不安の軽減－, 日本国際教養学会第２回全国大会, 岡山大学(岡山県・岡山市).

⑫ 岩中貴裕.(2012/12).英語学習におけるアウトプットの役割, 英語教育フォーラム「小・中・高等学校の英語教育と第二言語習得研究の関連」, 宮城教育大学(宮城県・仙台市). 招待講演.

⑬ 岩中貴裕.(2012/10).英語学習における多読と精読の役割についての一考察, 第 35 回岡山英文学会, 岡山大学(岡山県・岡山市).

⑭ 岩中貴裕.(2012/8).アウトプット・インプット活動が言語形式の保持に与える影響：言語指導は言語形式の保持を促進するのか？第 38 回全国英語教育学会, 愛知学院大学(愛知県・名古屋市).

⑮ 岩中貴裕.(2012/6).英語学習における多読と精読の役割, 第 24 回四国英語教育学会高知研究大会, 高知大学(高知県・高知市).

⑯ 岩中貴裕.(2012/6).英語力と学習意欲の向上に貢献する授業, JACET 中国・四国

支部 2012 年度支部研究大会，愛媛大学
(愛媛県・松山市).

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等：無し

６．研究組織
(1)研究代表者
岩中 貴裕（IWANAKA, Takahiro）
香川大学・大学教育開発センター・准教授
研究者番号：50232690